

「全くもう……なんでこの私がっ」

硬い靴音を響かせながら、楽園の最高裁判長である四季映姫・ヤマザナドゥはひとりゴチていた。硬い床、硬い壁、硬い天井。全てが厳肅に編まれた廊下はその声すらも無情に弾き、自ら放った言葉に貫かれては映姫の顔も余計に歪む。

ここは楽園の最高裁判所——ではない。

京都担当である閻魔が不在の間、代理として映姫が派遣され、かれこれ三日が過ぎようとしていた。

基本的に人口が少なく、それが故に仕事もなく、暇を持って余しては現世で説教を行っていた映姫であったが、流石に首都として栄える京都においてはそんな余裕など欠片もない。職務に忙殺され、こちらに赴任してからというもの碌に眠れぬ夜を過ごしていた。己が職務に殉じることが誇りとする映姫であるが、流石に疲労が蓄積し、思わず愚痴のひとつも零れてしまう。そんな自分に嫌気が差し、尚のこと苛立という終わりのなき悪循環。これでは自然と足音も、荒いものにならざるを得ない。

足を止め、息を吐く。

思考をフラットに戻そうと、もう一度深く息を吸い込んだ瞬間——背後からばたばたという足音が聞こえてきた。

「四季さま~~~~~！ 待つてくださいよう~~~~~」

間延びした声に振り返れば、秘書官である芹生が資料を両手に山と抱えて駆けてくるのが見えた。京都なら「せりお」じゃなく「せりよう」だろうと思わなくてもなかつたが、人の名前に突っ込むのも無粋と首を振り、こほん咳払いをして居住まいを正す。

「失礼。少し急ぎ過ぎましたね。申し訳ありません」  
やつの思いで追いつき、息を切らせていた芹生だが、頭を下げる映姫を見た途端、目を白黒させてぶんぶん首を振った。

「ちょ!?! 謝らないでください恐れ多い！ それもこれもみんな私がトロいのがいけないのです！ 四季様が頭を下げる必要など……」

「いえ、先の方は荒ぶる感情に身を任せ、ついつい先を急いでしまいました。周囲を顧みず、感情に流されるなど閻魔として恥ずべきこと。特に貴方には迷惑を掛けてしまったようです。本当に申し訳ありませんでした」

「いえいえっ！ 四季様はぜんぜんまったたく悪くあり

「いませんっ！ 私つてば昔から何をやらせてもトロくてみんなに馬鹿にされてましたし……八代様に目を掛けて頂けなかったら私なんて……ですから全て私が悪いのです。四季様に非などあるはずも……」

「いえいえいえ、部下の力量を見極め、それに合わせるのが上司としての責務です。無論、ただ怠けていたというのであれば叱責することもあるでしょうが、貴方は一生懸命やっているじゃないですか。今回の件は私情によって余裕をなくし、部下の状況を見極めることのできなかった、いえ見極めようとしなかった、私の落ち度なのです。そのように貴方が徒に己を責めることなんて……」

——うん、君たちウザい。

もしも全てを見通す神が存在するなら、そのように思ったであろう鬱陶しい会話は、まだまだまだまだ続いている。真面目で融通の利かない上司と、やつぱり真面目で頑なな部下の組み合わせだと、話がちつとも進みやしない。今頃鬼の居ぬ間のなんとやらで存分に羽を伸ばしているであろう三途の河の渡し守であれば、このようなこともなかるうに。

「いえいえ、ここは私が」

「いえいえ、やつぱり私が」

忘年会の会計時におっさん連中の間で交わされるような鬱陶しい会話は、結局それから五分以上も続けられることとなった——

S

映姫が楽園と呼ばれる幻想郷担当の閻魔であるように、ここ京都にも閻魔の役は設けられている。

八代巫姫・ヤマラクヨウ——この度めでたく結婚し、ハネムーンに出かけた彼女は、その間の代理として同期である映姫を指名してきた。無論、映姫も幻想郷における職務があるため、代理など無理とはつきりきつぱり断つたのだが、十王から「きみ、ヒマでしょ？」と言われて返答に窮し、結局あれよあれよという間に決定してしまったのである。宮仕えの辛さとはいえ、映姫の顔がニガヨモギを嚙んだように歪むのも致し方あるまい。

「そもそも閻魔の癖にデキちゃった婚つて何よ。いつの間にかそんな……こちらと彼氏どころか出会はずらなっていくのに。そもそもあいつは昔から要領だけはよくて、いつもいつもこつちに罅寄せが……おまけにハネ